

教科「情報C」を中心とした新聞活用の実践

実践校第2年次 長野県諏訪二葉高等学校 地歴・公民科 本山 修

1 本校のNIEの現状

- ・06年度からの継続校として新聞活用の実践は2年目になる。昨年度の教科「現代社会」における新聞活用は新聞が補助教材として位置づけられていたため、今年度は新聞を主役にした授業展開を試みた。
- ・昨年度は講座（クラス）単位の実践で、教師の個人的な取り組みとなったが、今年度は1学年生徒全員が参加した講義の開催と「HAPPY NEWS 2007」への応募、公開授業の実施など学年や教師間に広がりを持たせることができた。教科「情報C」は複数の教科にわたって担当者がいたことも幸いした。
- ・「情報C」を履修している1学年の生徒はほとんどが大学への進学を希望している。大学受験、さらにその後の「学び」においても新聞が身近にあってその「学び」を支えて欲しいと考えている。また、何よりも新聞に親しんでもらうことを願っている。

2 NIEで高めたい力（「情報C」の公開授業のねらい）

- ・情報の洪水のなかで、私たちは媒体を問わず様々な情報を自覚的に、または無自覚的に発見し、獲得している。そのなかで、情報リテラシーという能力、つまり、情報を選択する能力、情報及び情報検索過程を評価する能力、情報に基づいて新たな理解を生み出す能力、情報の背後にある問題を認識する能力はますます重要なものとなってきている。新聞という1つのメディアを通して、情報というものの性質を理解し、情報社会のなかで主体的に生きていく術を身につけて欲しいと考える。

3 研究の概要

（1）実践した教科等

- ・情報C（新聞の読み比べ・「HAPPY NEWS 2007」へのネット上からの応募・授業冒頭の新聞記事の読み合わせ）
- ・総合学習（信濃毎日新聞社より講師を招いて「新聞の読み方」出前講座を開催）

（2）新聞の提供状況

- ・新聞は教師が研究室で管理し、必要に応じて生徒に配布したり、印刷をした。

（3）新聞を取り入れた授業をする上で工夫したこと

- ・情報リテラシーの育成を目的に「情報C」では沖縄戦をめぐる教科書の検定意見に抗議した07年9月29日の沖縄県民大会について、新聞の読み比べ（報道の比較）を全国紙・地方紙合わせて8紙（琉球新報を含む）を使い行った。単に比較するだけでなく、新聞社による情報の価値付けの違いや選別の違い、情報そのものが持っている性質、複数の情報に

あたる意義、さらに情報に接する上での望ましい作法や態度について、参考図書などを利用し、生徒自身が考えを深められるようにした。

4 具体的実践の紹介

(1) 「HAPPY NEWS 2007」への応募 「情報C」の授業として

- ・概要 社団法人日本新聞協会が募集している「HAPPY NEWS 2007」に1学年の生徒205名全員にインターネット上で応募させた。NIEの事業で学校に届けられる新聞を数ヶ月分ためておいたものを使用。ハッピーな気持ちになる新聞記事を生徒自身に選ばせ、400字以内のコメントをワードや一太郎などのワープロソフトで書かせた。日本新聞協会のHPの応募フォームに必要事項を打ち込ませ、予めワープロソフトで作成した400字のコメントをコピーさせ、応募した。なお、各生徒が選んだ記事は、別途、日本新聞協会に送付した。情報機器の操作やインターネットの学習も兼ねた。

(2) 「情報C」の授業冒頭での新聞記事読み合わせ

- ・「情報C」で私が担当した2講座では、授業の冒頭で私自身が気に掛かった新聞の記事を印刷して配布し、読み合わせを行った。インターネットだけではなく新聞という情報メディアにも慣れ親しんでもらうことを目的にし、なるべく生徒自身が興味関心を持てるような記事を選んだ。以下は配布した記事の一覧表である。

4月	海賊版 我慢の限界(朝日07.4.11)	9月	あなたの安心 ネットでお買い物(朝日07.9.3) 今日の視覚 一票(信毎夕刊07.8.15) 今さら聞けない 検索サイト(朝日07.9.16)
5月	わたしの失敗 俳優ガッツ石松(産経07.5.8~) 家族 ある女優からの手紙(朝日07.5.20) 朝食欠食 体への影響データ裏付け(産経07.5.30)	12月	授業を捨てよ、町へ出よう(読売Y&Y進学特集07.10.20) 仮想世界の現実1(読売07.11.20) 聖火祖国へ6 小山修加(読売07.12.3) 天声人語 三方一両損(朝日07.12.7) 時代の証言者 藤原正彦15(読売07.12.12) もっと知りたい ネット書き込みで逮捕(朝日07.12.11) 日本がわかる世界がわかる 世界的な石油価格上昇(読売07.12.16) 日曜ナントカ学 積雪量カマキリがズバリ(朝日07.12.16) ルー大柴さんのお品書き(読売07.12.17)
6月	新しい人 伊藤理佐さん(信毎夕刊07.6.4) ネット君臨 第3部 近未来の風景1(毎日07.6.4)		
7月	逆風満帆 歌手アンジェラ・アキ(朝日07.6.16~)		
8月	新しい人 田中要次さん(信毎夕刊07.6.2) 流儀 私の仕事道 松沢いずみさん(信毎07.8.4) 名古屋拉致殺人事件 闇の職安(産経07.8.28)		

(3) 信濃毎日新聞社より講師を招いて「新聞の読み方」出前講座の実施 総合学習として

- ・概要 平成19年12月22日(土)1学年の生徒205名を対象に信濃毎日新聞読者センターから津金直行さん、畑光一さん、信濃毎日新聞諏訪支社から渡辺秀樹さんを講師に招いて「新聞の読み方」出前講座を実施した。生徒205名を3会場に分け、当日の信濃毎日新聞を生徒分用意していただき、新聞のできあがる過程や記事の構成などについてお話いただいた。また、生徒からの質問に答えていただいたり、当日の記事を生徒に読ませたうえで、自分の考えを書かせたりするなどの講座もあり、充実した内容となった。

5 実践学級の単元学習の報告

(1) 教科・単元名

- ・教科：情報C
- ・単元：総合演習 第2節 課題演習 「報道の比較」(教科書 啓林館「高等学校情報C 最新版」 P107)

(2) 教材

- ・信濃毎日新聞，朝日新聞，毎日新聞，中日新聞，日本経済新聞，読売新聞，産経新聞，琉球新報の各新聞記事

(3) 単元の設定・位置づけ・ねらい

- ・生徒は前段階として「情報社会と個人のモラル」という単元で情報モラルの学習をしている。そこでは情報の収集において「情報の受け手」としての望ましい態度や在り方とは何かについて学ばせた。これを踏まえて「情報C」の授業の締めくくりに課題演習を1つ実施する計画をたてた。課題演習は教科書にいくつか具体例が挙げられており、その1つに「報道の比較」という演習が設定されている。実際に報道の比較(新聞の読み比べ)をすることは「情報の受け手」としての態度についてさらに深く考える機会になると判断し、この授業を行うことにした。ある一つのできごとについて、新聞各社の報道の仕方が異なっている具体例を示し、情報そのものが持っている特徴(宿命)やインターネット、テレビ、新聞など様々なメディアから情報が大量に届けられる現代社会のなかで、情報の選択と複数の情報に当たる意義について生徒自身に考えさせることをねらった。

(4) 単元の展開

時	学習活動	教師の指導・支援
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ・1つのできごとについて各新聞社の報道を比較をし、新聞社各社の情報発信の違いについて理解する。 ・なぜ、新聞社によって報道の仕方が異なるのかを考える。新聞を比較したうえで分かったこと、情報はどのように我々に伝えられるのか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞社によって取り上げ方に違いがある記事を用意する。 ・各新聞(全国紙・地方紙の8紙)はコピーしたものを綴じて生徒に配布し、間近に生徒が新聞を観察できるようにする。 ・記事の扱いの背景となる新聞社の考えを各社の社説から読み取らせる。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ・情報そのものが持っている特徴(何かしらのフィルターがかけられざるを得ないということ)を理解する。 ・情報の比較(読み比べ)をすることの意義、複数の情報や自分とは異なる意見・考えにふれることの意義について参考文献をもとに考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み比べをして分かったことや、どのような新聞や情報源を選んでいきたいか、複数の情報源に当たる意義について、紙に自分の考えを書かせる。 ・情報社会の在り方について書かれた参考文献の一部を利用し、情報社会における情報の受け手としての在り方について考えを深めさせる。

(5) 本時の活動

主眼

新聞社各社によって報道の仕方、情報に対する価値の付け方に違いがあることを理解させる。その上で、自分がどのように情報を選択し、得ていくのかを考える。さらに、複数の情報を得ることや比較することの意義について考えるきっかけをつくり、次時につなげる。

展開

段階	指導内容	学習活動	指導・支援	時間
導入	・各社発行の新聞の種類と報道の違い	・新聞の種類の数について知る。	・全国紙、地方紙、ブロック紙の違いを説明する。 ・07年3月の教科書検定における沖縄戦集団自決の記述の修正をめぐる問題について新聞報道を比較しながら学習を進めていくことを伝える。	5分
展開	・教科書検定とは何か ・高校中学年向け日本史教科書の検定における沖縄戦についての修正内容 ・検定意見に反対する沖縄県民大会が各新聞社によってどのように報道されたかの比較 ・検定意見についての各新聞社の社説の比較	・「ニュースが分からん教科書検定って何のこと？」(朝日07.3.3)の記事を使い、教科書検定について理解する。 ・沖縄戦の教科書の記述がどのように修正されたのかを考える。(産経07.3.31,信毎07.3.31) ・07年9月29日の沖縄県民大会が翌日の8紙(信毎~琉球新報)で紙面にどのように扱われているかを実際に比較する。 ・取り上げ方の違いを表にまとめさせる。 ・各新聞社の社説を読み比べて、各社がどのような立場を取っているのか理解し、表にまとめる。	・教科書検定の大まかな制度を理解させる。(自分たちが使用している教科書がどのような制度の下で出版されているのかを理解させる) ・修正前と修正後の記述を比較させ、修正された内容を読み取らせる。 ・集団自決に対する日本軍の関与をこれまでに比べて不明確する記述に改められたことを理解させる。 ・歴史上の問題として住民の自決に軍の命令があったかなかったかは諸説あり、学者でも意見が分かれていることを付け加え、問題の核心までは深入りしない。 ・各紙の第一面を見せて、写真の大きさや記事の位置など報道のされ方を比較し、違いを読み取らせる。また、何が報道の仕方の違いを生んでいるのかを問う。 ・修学旅行で訪れる沖縄の人びとの声を理解させる。 ・沖縄県民大会の紙面での扱いの違いの背景となる各新聞社の考え・立場を社説から理解させる。 ・社説の全文を読む時間はないので、こちらで指示した部分を読ませて判断させる。 ・最終的には07年12月に訂正申請というかたちで軍の関与が教科書に記述されることになったことについても簡単にふれる。(朝日07.12.27)	55分

	<ul style="list-style-type: none"> 新聞によって情報の発信に違いがあることの意義（情報の比較と選択をすることの意義） 	<ul style="list-style-type: none"> 情報の比較と選択をすることの意義について考え、質問項目に書いて答える。 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞を比較してみて分かったことは何か考えさせる。（情報はどのように伝えられているのかを知る） 紙面において異なる立場の学者のコメントが採用されている2社の記事（産経 07.3.31,信毎 07.3.31）を再提示することで、新聞社の立場の違いにより提供される情報が異なってくることを明確にさせる。 報道の仕方や考え方が新聞によって異なるということ踏まえて、自分ならばどのような新聞を選び、情報を得ていくか考えさせる。 情報を比較すること、複数の情報源にあたることにはどのような意義があるか考えさせる。 現代はインターネットの発達とともに情報の比較がし易くなる（日経朝日読売による「あらたにす」の開始）一方で、必要な情報だけをカスタマイズできる状況にもあることを紹介し、情報をどのように入手していけばよいかということを投げかける。 	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 次時の課題提起 		<ul style="list-style-type: none"> 本時の新聞報道の比較を踏まえて、次時は『インターネットは民主主義の敵か』（キャス・サンステーション著 石川幸憲訳 毎日新聞社 03年）をヒントに、情報化社会において新聞やインターネット等から情報を得る上で、複数の情報を得て、さまざまな考えがあることを知ることを大切さを学ぶことを伝える。 	5分

配布した新聞のプリントなどの教材

○沖縄県民大会（07年9月29日）の翌日（07年9月30日）の各紙の扱い方

新聞紙名	信濃毎日	朝日	中日	毎日	読売	産経	日経	琉球新報
記事の有無								
第1面の扱い								
写真の扱い(前面か)								

○沖縄戦についての検定意見に対する社説の比較（賛否）

新聞紙名	信濃毎日	朝日	中日	毎日	読売	産経	日経
検定意見に対する賛否	(07.4.2)	(07.3.31)	(07.4.2)	(07.3.31)	(07.3.31)	(07.3.31)	

○新聞を比較してみて分かったこと（特に情報は要々にどのように伝えられるかという観点から述べてみよう）

○報道の仕方や考え方が新聞によって異なるということ踏まえて、あなたならどのような新聞を選び、情報を得ていきたいでしょうか？（具体的な新聞名ではなく、一般論として）

○情報を比較することや複数の情報源にあたることにはどのような意義があると考えますか？



生徒（K・M君）の記述（原文転載）

新聞を比較してみて分かったこと（特に情報は我々にどのように伝えられているかという観点から述べてみよう）

各新聞社で、その日の掲載する記事はそれぞれが重要だと思ったことが1面に来ていて、今回の記事では1面扱いでなかったり掲載されていなかったりと様々で、1つの新聞だけで記事の内容を理解していくのは難しいと思った。又、社説も新聞社によって意見が違って、その筆者（新聞社）の考えがそのまま我々に伝えられているのだと思った。

報道の仕方や考え方が新聞によって異なるということを踏まえて、あなたならどのような新聞を選び、情報を得ていきたいでしょうか？（具体的な新聞名ではなく、一般論として）

率直に言えば、事実を正しく伝えて、記事が信頼出来る新聞、そういう新聞を、数多い種類の中から選ぶのは難しいけど、考えが異なるのは仕方ないことだと思う。社説も、その社の考えに対して自分が賛成か反対か、共感出来るか出来ないかは自分の感じ方だと思った。でも自分的には自分と同じ意見の新聞を選びたい。

情報を比較することや複数の情報源にあたることにはどのような意義があると考えますか？

インターネットでもそうだけど、知りたいことに関して、いろいろな情報を比較すれば多くの考えや、新情報を吸収出来ると思う。又、間違った情報でないかどうか、とか、他にどんな考え方があるのかが見て分かることが出来る。

(6) さらに生徒に課した問題(以下の文章は実際に提示したものを省略してあります)

課題1 以下は『インターネットは民主主義の敵か』(キャス・サンスティーン著 石川幸憲訳 2003年 毎日新聞社)という本から抜粋した文章である。ここに描かれている著者が想像した「未来のひとこま」について何か問題点はあるでしょうか。「情報を比較すること」の意義を踏まえた上で、考えてみましょう。

それは未来のひとこま。テクノロジーのおかげで、人々は自分の読みたいもの、見たいもの、聞きたいものを「フィルタリングする(あらかじめふるいにかける)」絶大な能力を得た。(略)

政治に関心があるなら、自分のお気に入りの人たちによる、お気に入りの意見だけを聞きたいと思うかもしれない。その場合は、保守派、中道派、リベラル派、ベジタリアン、宗教右派、社会主義等々のどれかを選んで、その線で自分の好みの新聞をつくれればいい。(略)一般向け新聞・雑誌の影響力が低下し、グループごとに基本的に別の選択をおこなう、個人専用の番組構成が栄えているというわけだ。(略)

こうしてニュース、娯楽、情報の市場は、ついに完璧となった。消費者はまさに見たいものだけを見ることができる。(略)思い通りの情報通信の世界と呼べるものを築けるようになったのだ。

課題2 以下は「課題1」の文章の続きです。(1部省略してあります)筆者は情報を複数から得ることがなぜ大切だと述べていますか。また、インターネットと比べて新聞の良い点はどこにあると述べていますか。この2点について考えてみましょう。

(略)第一に、自分が最初から意欲的に選ばなかったものにも接触することが大事ということだ。予期せぬ思いがけない出会いは、民主主義それ自体の中核である。そうした出会いには、自らは求めなかった、たぶんいらいらさせられる話題や見解が往々にして含まれている。こうした出会いが重要なのは、同じ考え方の人たちとだけ会話をしていれば陥りやすい分裂や過激主義への抑止になるからだ。(略)その名に値する民主主義では、人々はときに自身の選択ではない見解や話題にもさらされるべきだと私は主張する。

こうした一般メディアに依存している人は、いろいろな人たちとの共有体験や、もともと興味がなかったものや話題に触れるというような偶然の出会いの機会に恵まれる。例えば地元紙を読むと、かりに選択が可能であっても選ばなかったであろう記事を読むことになる。ドイツの民族間の緊張、ロサンゼルスでの犯罪、あるいは東京での革新的な企業経営といった記事が目に入り、目が奪われ、それがあなたの「デーリーミー」に登録されていなくても読み進めるかもしれない。お気に入りのチャンネルで大好きな番組を見終わったあと、見る予定はなかったがちょっと面白そうだと思う次の番組を見続けてしまうかもしれない。(略)それがきっかけで興味が芽生え、行動だけでなく人生そのものが変わることだってあるだろう。個人が閲覧する内容をコントロール出来ないシステムはどこか公道に似たところがある。...

6 研究のまとめ(生徒の反応・評価・課題など)

- ・沖縄県民大会を2面にわたる大きな写真を使用して報じた琉球新報の実物を見せたときにはどよめき起きたクラスもあった。(ただし、主催者発表の11万6千人と報じられた参加者数については、異論を掲載した新聞もあったことも付け加えた)教科書検定の問題の受け止め方が、本土と沖縄で大きく違うことを感想に述べた生徒もあった。また、何より各新聞によってこれほど取り上げ方が違うのかということに驚いていた様子が多く見受けられた。普段新聞を読まない生徒も今回の読み比べの授業の中で新聞はどれも同じではないことに気付いてくれたようであり、それを面白いとも感じてくれたようだ。ただし、読み比べの先にあるものを生徒自身が掴まなければこの授業の意義はなくなってしまう。参考文献を利用しながら、情報そのものは何かしらのフィルタリングにかけられなければ伝えられえないということ(宿命)、フィルタリングされたあふれる情報のなかでどのように情報を選択していくのか(それはフィルターを選ぶことでもあるのだが)、情報社会におけるあるべき情報の受け手の姿とは何か、生徒自身がそれぞれに自分の考えを深めてくれたように感じている。自分とは異なる意見や考え(情報)にも積極的に触れていって欲しいというのが私の願いである。なお、生徒間で自分の考えを発表させる機会があまり確保できなかった。情報の受け手としてだけでなく、送り手としての在り方を模索させることが次の課題である。